



格好の遊び相手

木梨憲武

紙とペンさえあれば、らくがきができる。これこそがゼロ地点からの出発。ちよいとそれが気に入れば、タイトルをつけてみる。さらに気分が乗ってくればそれが絵のモチーフになって、気合いを入れて描いていく。その時点で抽象か写実かがはっきりしてくる。そして額装されて作品になって展覧会に出品することになる。これがオレの最近の作画の流れになっている。

子供のころからチラシ広告やカレンダーの裏にらくがきをしてきたし、小学校で使うノートもいつの間にか日記や仲間の似顔絵、漫画などで埋め尽くされていた。そんな風に育ってきたから、大人になってからも、大好きな競馬で負けた時、場外馬券場の昔の投票に使うマーク

シート用紙は裏が白かったから、もったいないやら悔しいやら、持っていた赤ペンだけでキャラクターを描いたら、結構いい作品に仕上がったのには自分でも驚いてしまった。

打ち合わせの資料のコピー用紙も裏に印字がないヤツはどうしても捨てられない世代なので、取っておいて半分は切ってクリップで留めてメモ用紙に使う。これは秘密にしておきたかったのだけれど、このところ作詞に挑戦していて、この自家製メモ用紙に書いて、「おっ、なかなかいいのが書けたじゃん!」と満足して帰宅して、翌日読むとこれが何とも恥ずかしい出来栄で、人になんか見せられない。これが曲につくなんて無理。破り捨ててやろうと思うのだけれど、歌詞として読むのではなく、文字の模様のある下地として見ると、そこに色をのせてみたくなる。これもなかなか面白い作品になるのだからわからないものだ。

ウチの辺りは金曜日が紙の資源ゴミの回収日で、出すのはオレが係なのだけれど、ダンボールをまとめて結わえて出す途中で、お、こいつはハサミで切ったり、ビリッと手で破いたりすると面白い表情



きなしのりたけ●マルチタレント。東京生まれ。1980年とんねるずを結成しタレントとして活躍する一方で、アトリエを持ち作家としても活動。日本のみならず、ニューヨーク、ロンドンでも個展を開催する。現在、木梨憲武展Timing-瞬間の光り-が日本各地を巡回中。昨年木梨レコードを立ち上げて音楽活動にも取り組んでいる。

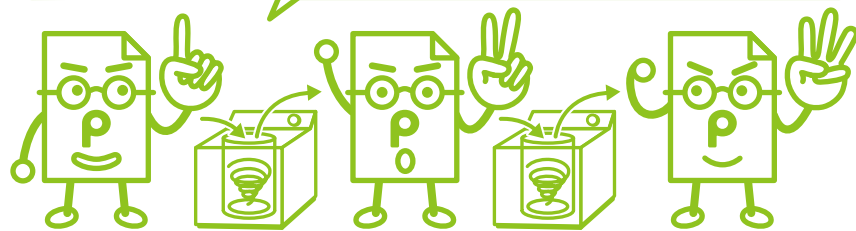
になるな! と閃いて、手のひら大の妖精たちをダンボールから切り出して作るキャラクター、「フェアリーズ」シリーズに繋がった。下描きもせず、アドリブでハサミを使って紙を切っていく気持ちよさにもはまった。最初は色を塗ろうかなと思っただけ、綺麗なお菓子のパッケージやいいデザインの薬の箱などの色のついた部分から目や鼻、口なんかを切り出してボンドで貼り付けて仕上げてみると、これがいい。名前を付けたり、家族を作ったり、妖精に纏わるストーリーを考えたりしてすっかり熱中してしまい、ステイホーム期間になんと一〇〇〇体も製作してしまった。

もう五〇代後半ですっかりジジイ化が進んで、寝ても朝四時ごろ目が覚めてしまう。でも考えてみれば家族が起きてくる前の二、三時間は貴重な自分の時間なわけで、紙はそんなオレの格好の遊び相手になってくれている。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙の人生は、3回以上ある。

紙は「パルプ」と呼ばれる木材などの植物繊維の集合体。だから、ときほぐして、インクなどの余分なものを取り除けば、また紙になれるんです。ちょうど洋服を洗うみたいに、紙専用の洗濯機でかき混ぜると、トロトロの繊維の状態に。何度もくりかえすと繊維は劣化していくけれど、一般的には3~5回もリサイクルできるんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。](http://kamitsubu.com/) <http://kamitsubu.com/>

今回は12月3日号、川越宗一さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo : Keiji Ishikawa